

STUDENT EXCHANGE NEWS



近江兄弟社中学・高等学校 国際交流委員会・留学生センターニュース

ISSUED BY THE INTERNATIONAL EXCHANGE COMMITTEE, OMI BROTHERHOOD SR. & JR. HIGH SCHOOLS

さようなら留学生

前号で紹介をした二人の短期受け入れ留学生の修了式がそれぞれ行われました。大変短い期間でしたが、それぞれ中身の濃い体験をしてくれたようです。

Determined to Come Back

Alexander Sutterfield (アレックス)

滋賀県・ミシガン州交流プログラム

出身：Danseville High School (アメリカ・ミシガン州)

期間：2016.7.1～14

ホスト生徒：I21 山本 芙生



When I landed in Japan, I already knew that I didn't want to leave.

I've had lots of fun since I've been here. I went to many great places and met old friends I haven't seen for years. I've made so many new friends in only a few days of school. I've experienced so many great things. Like taking a train

to get to school everyday and I got to go to many temples and shrines.

It will be a sad plane back to America because I will be leaving so many friends behind. Going to Japan was the best decision I've ever made, so I am determined to come back one day, hopefully with more knowledge on the Japanese language. ありがとうございます。



"Is Japan fun?" — 「はい」

Thomas Ladouveur (トーマス)

YFU 短期プログラム

出身：North Farmington High School

(アメリカミシガン州)

期間：2016.6.20～7.20



こんにちは。四週間まえ、ぼくは、はじめてこの学校にきました。なんにも、わかりませんでした。でも、いまは、ともだちと、にほんのかぞくとなかよしになりました。ときどき、私は、さびしくて、ホームシックでした。でも、みなさんにたすけられました。そして、いまでは、よい思い出になりました。



時々、日本語が、むずかしくて、通じないときがありました。たとえば、母とはじめてあったとき、わたしたちは、レストランにいきました。そして、私は、ベジタリアンですから、たべものをたのむのは、むずかしかったです。

でも、わたしの留学は、たのしいことがいっぱいです。友達と映画館に映画をみにいきました。家族と、京都にいきました。学園祭の文化の部で、学校をあるきました。学園祭の体育の部で、ボールをなげました。日本で、みんながすることは、

すてきでした。日本にくることは、すごいことでした。そして、たくさんの人は私に、Is Japan fun? とききました。答えは、「はい」です。みんながいたから、日本でどのせいかつはとてもたのしかったです。ありがとうございました。

留学レポート

留学機関を通じて、ドイツ、ハンガリー、アメリカにそれぞれ長期留学していた高校生のレポートを掲載します。

学んだこと

131 安藤 優里香
YFU 留学生

留学先: Eric-Kandel-Gymnasium (ドイツ)
期間2015.7.31 ~ 2016.7.8



約1年の留学を振り返ってみるととても短い1年だったと感じます。ドイツの文化についてもドイツ語についても全くの無知で、留学に行くのは私にとっては大きな挑戦となりました。

留学生活で学んだことは書ききれないほどありますが、その中でも自分には全く新しく一から学んだものは難民についてです。一度留学中のレポートに書いたこともあります。ドイツのメルケル首相は大量の難民を受け入れることを決め、アフガニスタンやシリアから大量の難民が流れ込んできました。出発前私はそのことについて全く知らず、ドイツに着いてすぐ駅に行くとは半分以上はドイツ人ではない外国人(難民)でとても衝撃を受けました。日本にいと難民と接する機会ほぼなく、そして、あまりいいイメージはないと思います。実際、私も良いイメージはなく、お金がなく家もない、そして怖い、というイメージがありました。しかし、それは全く違い、難民は自分の国では戦争が行われていて住むのが危険だから逃げてきたわけで、決してお金が無いわけではありません。それどころか、身なりもきちんとしており、家も政府が建てた綺麗な難民ハウスに住ん

でいます。

ところが、ドイツ語ができない難民は就職するのが難しく、そうしていくうちにお金がなくなっていき、治安が悪くなったりしてしまいます。ですが、そんな人達はほんの少しで、私が学校で友達になったアフガニスタンからきた子や、その子達の親もしっかりとドイツ語を学ぼうとし、しっかりここで生きていこうとしていました。

そうしたことを見たり聞いたりしているうちに、なぜ日本は難民を受け入れられないのか、受け入れたとしても日本人は大量の外国人に対応できるのか、なども考えるようになりました。一度授業でもこれがテーマになり、みんなで考えたこともありました。

そして、この「考える」ということもこの1年で学んだことです。ドイツ人は比較的日本人と似ていると言われることがありますが、ドイツ人は日本人よりも物事を論理的に考えています。それは時々私には難しいことで、嫌な時もありました。留学前の私は物事に対して、「なんでもいいやん!」という考え方をしていました。そのせいで物事をしっかり考え、筋を通して人と話し合う授業は言語以前の問題で、大変でした。今でもそれはあまり好きではないですが、前よりは物事をしっかり考えられるようになったと思います。

思い返すと、辛いことやうまくいかないこともたくさんありましたが、それもすべて自分を成長させてくれた種だったと思います。そして、それを忘れさせてくれるような素晴らしい思い出もたくさんできました。別れる時に涙を流してくれる友達ができ、すべてが恋しくて涙を流すことができ、それだけ充実した1年だったのだと思い、とても嬉しいです。

この機会を与えてくれた家族や支えてくれた友達や先生に感謝の気持ちを持ち、学んだことを忘れずにもっともっと成長していければいいと思います。

何かアクションを起こすこと

121 早川 京佑

YFU 留学

留学先: ハンガリー

期間: 2015.8.12 ~ 2016.7.1

僕は、ハンガリーに約10か月間留学をしていました。10か月というとても長く感じますが、体験してみるとそんなことはなかったです。おそらく、ハンガリー生活が新鮮で充実した日々を送っていたと感じたから短く感じたのかもしれませんが、もう一年留学したいと思ったほどです。1か月以上海外に滞在したことがありませんでしたので、留学行く前は期待より不安のほうが大きかったです。

す。英語やハンガリー語が話せるのかな、ホストファミリーと仲良くできるかな、ホームシックやカルチャーショックにならないかな、など多くの不安がありました。また、事前学習を受け、どのようにホストファミリーと接するか、何を目的として留学をするのかをほかの学生たちと話し合いました。

ハンガリーに着いてすぐ YFU の arrival orientation がありました。そこでは、夏にハンガリーで 10 か月過ごす留学生が集まり、一人ひとりの思いを職員に伝える場がありました。例えば、留学中にしたいこと、不安なこと、ハンガリーの挨拶や文化のことなどを話し合いました。すぐにハンガリー語を話すのは無理なのですべて英語で行われました。そこで僕は自分がどれだけ英語が話せず、理解できないのかということを実感しました。しかし、僕は全く落ち込むことができませんでした。「10 か月もあれば英語やハンガリー語もきっと話せるようになる！」と自分に言い聞かせ、残りの 3 日間を過ごしました。

いよいよホストファミリーに留学生たちを引き渡す時が来ました。そこで僕はまだ、覚えたてのハンガリー語を使い自己紹介をしました。僕のつたないハンガリー語でも真剣に聞きながら聞いてくれました。初めの 2、3 か月はホストマザーに英語を毎日教えてもらっていました。すると、自分が思っていたよりもはやく話せるようになりました。4 か月が経った頃には、自分の思ったことを伝えられるようになりました。そして、僕はホストマザーに次はハンガリー語を教えてほしいと頼みました。マザーは、快く受け入れてくれました。しかし、3 か月経ってもあまり上達はしませんでした。理由は、ハンガリー語の発音が難しかったことと文法がとても複雑だったことです。あとは、自分が英語を話せるようになって満足してしまったためです。英語もそうなのですが、発音が正しい発音でないと現地人には伝わりません。ですから、話している途中で「え？今、何て言った？」とよく聞かれました。しかし、だんだんと話しているうちに発音が良くなりました。「言語は使ったら使った分だけ成長するのかな」と思いました。

いよいよ帰国の日がやってきました。ホストの人達に「また、いつでもハンガリーに来てね！いつでも家は開いているから！」と言われました。僕は、ハンガリーのこの家族が二つ目の家族になったことがとても嬉しかったです。これからもホストファミリーとの交流は続けて行きたいと思っています。

僕は、この留学で数多くのことを経験し学びました。その中で大切だと思うことは、とりあえずチャレンジしてみるということです。この留学で沢山のチャレンジをしました。学校は、授業ごとに受ける教室が違います。ですから、クラスメイトに聞かなければなりません。初めての

きは、英語もろくに話せず、右も左もわからなくて、よく困りました。幸いホストシスターと一緒にクラスだったのでよく教えてくれました。このことを通して、分からなかったらとりあえず何かアクションを起こすことがとても大切だなと思いました。

この留学で色々なことを経験し、自分でも少しは成長したのかなと思います。この経験を活かし、自分にできることを見つけたいと思います。

ただ今留学中

"Help each other."

P13 今村 光希

姉妹校中期留学

留学先：Citipointe Christian College (オーストラリア)

期間：2016/7/16 ~ 2016/8/27



オーストラリアに来て 2 週間になります。だんだん学校やホストファミリーの生活にも慣れてきました。はじめは、ホストファミリーや先生の言っていることが理解できず、日本に帰りたいとずっと思っていました。家族や友達の顔を思い出すたびに泣きそうになりました。しかし、今は授業も少しずつわかるようになり、ホストファミリーとも会話できるようになり、だんだんオーストラリアの生活が楽しくなっています。

今、オーストラリアは、冬ですが、とても過ごしやすいです。四季がはっきりしている日本では信じられませんが、昼間は長袖でも、半袖でも過ごせます。朝と夜はとても冷えます。しかし、ホストファミリーは、みんな半袖です。とても乾燥していて、日本人は少し風邪気味です。オーストラリアでは Citipointe Christian College という学校に通っています。乳児保育園から幼稚園、小学校、中高の学校、キリスト教を学ぶ大学まであり、ヴォーリズ学園と似ています。

私のクラスは international college と言って、留学生や親の転勤などでオーストラリアに来ている生徒が集まったクラスです。international college は、

先生がとてもいい人ばかりで、とても英語が学びやすい環境です。international college の中に3つのクラスがあって、すべてのクラスをクリアできればメインストリームという普通の高校に上がれます。

今いるクラスは日本人が4人、中国人が6人、韓国人が1人います。私の隣は Lisa という中国人の女の子です。先日、Lisa が中国のしおりをくれました。そして、日本についてたくさん聞いてくれました。いつも、ニュースを見ていてあまり、中国にいい印象がなかったのでもって驚きました。日本が勝手に思っているだけで中国は日本にとて

も興味を持っているということを知りました。授業では、よく先生が"Help each other."とよく言えます。今まで違う国の人と同じ授業を受けることはもちろん、一緒に1つのことを考えることがなかったのでもって新鮮でとても面白いです。

international の授業は板書がほとんどなく、参加型の授業がほとんどです。参加型のほうが、授業に興味を持ちやすくいいなと思いました。日本に帰ったら international の学習をいかして、英語や他の教科を勉強したいと思います。

(2016/07/23 受信)

ホストファミリーの感想

期間は、7月4日(月)から7月10日(日)の6泊7日の日程で、オーストラリアの姉妹校 St. Patrick's College の一行(生徒14名と先生4名)を受け入れました。ホストファミリーの感想が寄せられましたので、紹介します。



コミュニケーションで大切なこと

G16 山本 海璃

ゲスト留学生名: Caleb Robinson



彼と過ごした一週間はとても楽しかったです。慣れない英語で話し、理解してもらえないことも多くありましたが、ジェスチャーや翻訳アプリなどを使い、伝えることができました。

私は、今まで外国の人と直接的な関わりをもたることがなかったので、最初はコミュニケーションをしっかりとることができるかととても不安に感じていました。

しかし、実際に Caleb と会話をしていくなかで、言語はあまり関係がないことに気づきました。

それは、彼がとても積極的に自分の国のこと、家族のこと、そして将来のことなどを私だけでなく、私の家族にも伝えてくれたからです。

そのとき、彼はほとんど日本語を話すことはありませんでしたが、故郷の地図や土産物を指差し、身振り手振り、簡単な単語だけで一生懸命伝えてくれました。それで彼が伝えたいことは十分に伝わりました。それ以降、私も彼を見習って積極的に彼とのコミュニケーションを図るようにしました。

家族と一緒に奈良の東大寺と大阪城に行ったときには、仏教という日本の文化のことと、戦国時代という日本の戦争のことを彼に伝えました。その感想として彼が「仏教にとっても興味がでた。タスマニアの人は信仰心がそれほど強くないので、仏教にチェンジしたい。」と言ってくれたときは、ちゃんと伝わった気がしてとても嬉しかったです。

一番大切なのは伝えたいと思う気持ち。それが今回の彼と一緒に過ごした期間で最も勉強になりました。

また、ホームステイの最後に「日本で一番驚いたことは何か」と彼に訪ねてみたとき、彼の答えは、「母親がランチの準備をする。タスマニアは自分のランチは自分でする。」でした。

私は、今まで母がいつも弁当を作ってくれていることは当たり前と聞いていたので、すごく心に響きました。今後は、母を含め、父や友人、先輩や先生など、自分の周りの人に感謝する気持ちを持って成長していきたいと思いました。そして、いつの日か気持ちだけでなくしっかりと英語でコミュニケーションがとれるようになって、タスマニアを訪れたいという夢ができました。